

国語

(解答はすべて解答用紙に記入しなさい)

□ 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(問題の都合上、省略した箇所があります。)

ここには二つの友情の形がある。一方において、『ONE PIECE』に代表されるような、自律的な人間同士の友情がある。他方において、「友だち地獄」と評されるような、他律的な「空気」に支配された友情がある。前者が友情の理想であり、後者がその現実である。現代の若者はその狭間で引き裂かれているのかも知れない。そしてそれが、友情を面倒なものにしたり、息苦しいものにしたりにしているのかも知れない。

しばしば、そんなにも息苦しいのならば、友情なんか重視しなくていい、友達との関係なんか放棄してしまえばいい、と論じられることもある。たしかにそれも一つの考え方だろう。友達がいらない人生だって、きつと幸福に満ちたものでありえるだろう。

しかし筆者はこうした議論にあまり魅力を感じない。なぜならそれは、友情が必然的に息苦しいものになること、欺瞞に陥る関係性であることを、むしろ肯定することになるからだ。それは友情の可能性を自ら矮小化し、過小評価することのよう^①に思える。むしろ私たちが問い直すべきなのは、本当にそれだけが友情のあり方なのか、それとは別の友情もありえるのではないか、何よりもそれ以前に、そもそも友情とは何か、ということではないだろうか。

友達関係は、互いが友情を認め合うことで成立する。そうであるとすれば、互いが友情をどのように定義しているのか、友情をどのように理解しているのかによって、その関係性はまったく違ったものになるはずだ。そして、そうした友情の概念が一つに限定されなければならない理由なんてない。そこには多様な友情の可能性を認めることもできるはずだ。

ある友情が、私たちに息苦しさをもたらすものであったとしても、それだけが唯一の友情のあり方であるとは限らない。別の角度から友情を理解できるようになれば、私たちは友達との関係を新しい形で理解し、そこに今まで気づくことのなかった何かを見出せるかも知れない。友情に新たな可能性を、新たな価値を認められるようになるかも知れない。

『ONE PIECE』にエガ^①かれているような、自律的な個人間の友情も、一つの友情の概念である。そこに示されているのは、互いが揺るぐことのない自分の信念を持っていて、仲間からどう思われるかを気にすることなく、ソツチョク^②に意見をぶつけ合える関係だ。A、そんな関係がキズけたら素晴らしい。しかし、それが最高の友情とは限らない。それだけが友情であるとは限らないのだ。

友情とは何か。それは一つの哲学的な探求である。実際に、過去のイダインな哲学者たちは、私たちよりもはるかに多様に、豊かに、キバツな仕方^⑤で友情を論じてきた。そこには私たちのまだ知らない、**B** 忘れ去ってしまった、豊穰な友情の可能性が眠っている。

そうした英知を探訪しながら、友情の概念を問い直し、単純化された理想像を相対化すること。それによって友情を新しい光のもとで眺めること。

³それが本書のテーマである。

もつとも、そのように友情を問い直すためには、それに先立って、友情とは何であるかが漠然と理解されていなければならぬ。私たちは、ほんやりとはわかっているが、はっきりとはわかっていないことこそ、問うことができるからだ。

C 友情は、互いの感情だけをつながりとする関係性である、と定義することができるだろう。そしてここから友情に備わる次のような性質が導き出せる。

第一に、友情とは、**4** 関係である。たとえば恋愛をするとき、人は基本的には契約をする。「付き合ってください」と告白し、それに対して合意を得ることで、はじめて関係性が成立する。そうした契約を伴わない恋愛は暴力に発展する可能性があり、望ましくない。それに対して、友情が契約に基づくことはほとんどないし、あつたとしても不必要であると思われる。たとえば誰かと友達になるとき、「友達になってください」と告白し、合意を得ることはあまりない。

また、第二に、友情とは **5** 関係である。たとえば家族は戸籍という形で国家に管理されている。国家は、「私」が誰と家族であるかを把握しており、問題が生じれば「私」に対して何らかの働きかけをしていく。しかし、私たちは自分が誰と友達であるかを誰にも申請しない。だからこそ、国家は「私」が誰と友達であるかを把握することができない。したがって、友情を管理するのは、その友情を交わしている当事者だけ、つまり友達同士だけである、ということになる。

そして第三に、友情とは、**6** 関係である。たとえば恋愛において、関係を終わらせるには別れ話をしなければならぬ。夫婦が離婚するためには国家に対して離婚届を提出しなければならぬ。これらの関係性において、自分以外の誰かからその承認を得なければ、「私」はその関係を解消することができない。しかし、友情の解消にそうした承認は必要ない。友達のうちの一方が、もうその友情を終わらせたいと思えば、その瞬間に関係性は解消されるのである。

友情とは、契約に基づかず、誰からも管理されず、常に解消可能な関係である。これらは、友情が満たさなければならない条件として、前提にしても構わないだろう。そして、ここから導き出される帰結は、友情は本質的に不安定である、ということだ。

私たちが誰かと友達になったとしても、その関係を「私」の代わりに保証してくれるものは、何もない。友情は常に存続の危機に立たされている。友情を継続するためには、友達との関係を配慮し続け、友達に対して働きかけなければならない。炎に薪をくべ続けるように、自ら関わりを作り出さなければならないのだ。そうした活動を少しでも怠れば、友情は簡単に解消されてしまう。だからこそ誰かと友達でい続けることは、新しい友達を見つけることよりも、はるかに難しいことなのである。

(出典 戸谷洋志「友情を哲学する 七人の哲学者たちの友情観」光文社による)

問一 ……線①〜⑤のカタカナを漢字に直しなさい。

問二 **A** **C**に入る言葉として最も適当なものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア あるいは イ しばしば ウ もちろん エ けっして オ さしあたり カ なぜなら

問三 線1「その狭間で引き裂かれている」とありますが、どういうことですか。その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 自律的な人間同士の友情と他律的な「空気」に支配された友情の二つの友情のうち、どちらが正しいのか現代の若者は迷っているということ。

イ 他律的な「空気」に支配された友情が現実であると理解しているので、友情を面倒に感じたり息苦しく感じたりしているということ。

ウ 「ONE PIECE」のような友情にあこがれを抱いているが、「友だち地獄」が現実であると気づいてあきらめの気持ちでいるということ。

エ 自律的な人間同士の友情が理想であると理解しながら、他律的な「空気」に支配された友情の現実を引き受けなければならないということ。

オ 他律的な「空気」に支配された友情のほうが現実的で身近にあるからこそ、かえって自律的な人間同士の友情が理想的に見えるということ。

問四 ― 線2「こうした議論にあまり魅力を感じない」について。

1 「こうした議論」の指す内容を本文中から一文で抜き出し、その最初の五字を答えなさい。(句読点等記号も一字に数える。以下の問いも同じ)。

2 筆者はなぜ「魅力を感じない」のですか。その理由を本文中から四十八字で抜き出し、最初と最後の五字を答えなさい。

問五 ― 線3「それ」とはどういうことですか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 友情の概念が一つに限定されなければならないという考え方を否定し、各人の定義にしたがって友情が成立していることに気づくということ。

イ 過去の哲学者の知見を参考にして、友情を別の角度から見直すことでその多様性を考え直し、新たな可能性や価値を探索すること。

ウ 現代の若者の息苦しさを解消するために、本当の友情とは何か、互いが友情を認め合うとはどういうことかを新しく見つけ直すということ。

エ 過去の哲学者の英知を探訪しながら、忘れ去られてしまった豊穰な友情の可能性を発掘することで、理想的な友情観を相対化すること。

オ 自律的な個人間の友情も一つの友情の概念であることを理解しながらも、それだけが最高の友情とは限らないことを世の中に広めるということ。

問六 4～6に入る言葉をそれぞれ十字以内で答えなさい。

問七 ― 線7「はるかに難しい」のはなぜですか。五十文字以内で説明しなさい。

□ 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(問題の都合上、変更した箇所があります。)

屋上に設置された、完成したナスミス式望遠鏡の前に、彼女の口から「わあ」とため息のような声が出る。

「すごい」

砂浦三高天文部のナスミス式望遠鏡は八角形のフォルムをしている。車椅子に座ったままでも接眼部を覗き込みやすいようにと、凛久の提案でそう設計したのだ。

約束通り、望遠鏡のお披露目会には、SHINOSEの野呂さんをはじめとする作業着姿の人たちと、オンライン上に、ひばり森中学校理科部や御崎台高校物理部、五島天文台のみんなも招かれていた。

完成した望遠鏡について、凛久と亜紗が中心になって説明する。
凛久が、まず、この望遠鏡の発明者であるナスミスの経歴を十九世紀に遡って話し始めて、亜紗は正直、「えっ、そこからかよ」と思った。だけど、誰ひとり退屈そうな人はいなくて、皆、興味津々といった顔で聞き入っている。説明の中では、凛久が高校入学前に見つけたという、海外の老人ホームでの観測会の記事も紹介された。

説明を終えると、いよいよ観測。凛久と亜紗が接眼レンズを覗き込み、天体を導入する。^①
最初に入れるのは、土星と決めていた。

亜紗や凛久が入部してすぐの頃に空気望遠鏡で先輩たちに見せてもらって感動したあの星。¹ 亜紗が最初に見て思ったのと同じ感動が伝わりますように、と祈る。

視野に土星を導入した望遠鏡から、凛久と亜紗が離れ、観測する人たちに場所を譲る。^②
花楓が覗き込む時、亜紗は思わず呼吸を止めていた。

彼女が車椅子を進めて、接眼部に向けて身を傾ける。亜紗も凛久も、それにおそらく、他の天文部のメンバーやパソコンの向こうのみんなも、固唾をのんで、その様子を見守る。²

SHINOSEから鏡筒部のフレームが届けられた後、凛久は何度も、本当に座ったまま観測ができるのか、微調整を繰り返ししていた。最初は普通の椅子でやっていたのだが、少しして、綿引先生が「近くの施設から借りてきたよ」と本物の車椅子を用意し

てくれて、みんなで順番に座って、無理ない姿勢でどうしたら観測できるか、背が高い人が利用する場合、低い人が利用する場合、いろんな想定をしながら、改善点を探っていった。

花楓が片目を閉じて、レンズの向こうを見る。声が、出た。

「きれい」

姿勢に無理はさせていないようだ——と思う。大事なものに触れるように、花楓の右手がそと接眼部③に添えられる。きれいな、とまた声が聞こえた。

「ほんとに土星だ。見えるんだね」

「はい」

亜紗たちが作ったナスミス式望遠鏡の最低倍率は120倍。土星の輪まできちんと見える。これまで図鑑などで見てきた通りのあの輪の形、あの土星が本当にあるんだと、昔、亜紗も凜久も感動した。

「美しいな」

花楓が言う。美しい、というその響きが夜空にまるごと吸い込まれていくようで、その声を聞きながら、亜紗は思い出し出していた。ナスミス式望遠鏡の最終調整をしている時に、凜久から聞いた話だ。

——車椅子バスケットか、あるじゃん。パラリンピックとかでも競技種目になってる、障がい者のためのスポーツ。活躍してるスターがいっぱいいるけど。

³ちよつと不服そうに、笑わない顔で凜久が言っていた。

——あれ、すごいなって思いながら、だけど、ずっと思ってた。うちの姉ちゃん、スポーツにはあんまり興味ないから、別の方向で長所、広げてほしいなって。そうできないとしたら、なんかおかしいなって。

「凜久、言っていました。——姉ちゃんは、子どもの頃からオレのスターだったんだって」

花楓が望遠鏡から離れた後で、亜紗がそつと話しかけた。凜久は一年生たちと一緒に、パソコン画面の向こう側に向けて、ナスミス式望遠鏡から見える天体の様子を解説している。綿引先生が今日はレンズに取りつけるカメラを用意してくれたので、設置した大きなモニターに、望遠鏡から見える光景が表示できるようになっていた。

凜久がこちらを見ていないことを確認して、こっそり、教える。

「勉強ができて、学校で教えてくれないこともすごくたくさん知ってるお姉さんのことが自慢で、特にお姉さんから聞く宇宙の話が大好きだったって」

身体をそややって堂々と褒めるのは、なかなかできないことだと思う。凜久だって、普段はおそらくそうしない。——亜紗たちにだから安心して話してくれたのだろうと思つたら、とても光栄だと感じた。

「そっか」

亜紗の声を受けて、花楓が微笑ほほえんだ。弟の方を見て、眩まよしそうに目aを細める。そして言った。

「亜紗ちゃん」

「はい？」

「星を見せてくれてありがとう」

花楓から、親しげに「亜紗ちゃん」と呼んでもらえたことが嬉うれしくて、むずむずする。だから、その日、亜紗から誘った。もしよかつたら、来月のISSもまた一緒に観みませんか——と。

「こんな楽しいことが待ってるなんて、思ってたなかった」

天を昇っていくISSの光を見つめながら、亜紗の隣で花楓が言う。その声を聞いて、どう言っていいたかわからないくらい、亜紗も嬉しくなる。

ISSが、空をよぎっていく。

興奮したみんなの声を受けながら、山の向こうへと消えていこうとしている。光を惜おぼしむように、亜紗たちは声を送り続けた。

ありがとう、バイバイ。

バイバイー

というところかの声を聞きながら、その時、屋上で、ふいに声こゑが破裂はくはくした。

「あ——っ——」

凜久の声だった。ISSの光の点が完全に視界から消え、あとには、冬の星座と、赤く点滅する飛行機の光だけが残った空を仰ぎ、大声で、凜久が叫んだ。

長い声は、しばらく、止まらなかつた。凧久が少し息苦しそうにし、口元のマスクの位置を直したところで、姿勢を元に戻す。そして言った。

「転校、したくねえーなー!」

唇を、噛み締めた。そうやって耐えようとしたけど、——ダメだった。亜紗の目から涙が噴き出る。完全なる不意打ちだ。一気に顔が熱くなる。

「凧久、やめろっ!」

亜紗も叫ぶ。

「泣いちゃうじゃん。勘弁してよ!」

「わ、すげ、亜紗、泣いてる?」

「だって……!」

恥ずかしくてあわてて顔を押しさえて俯くと、一年生の深野のとても冷静な声が出た。

「つていうか、凧久先輩も泣いてませんか? 目、潤んでます!」

「いやー、そりゃ、泣くでしょ。青春ですから!」

青春ですから。

その声に顔を上げると、凧久が目を押しさえ、マスクをずらしていた。

それを見て、驚きつつ、同時に、すごいなあ、と思う。深野さん、普通、こういう時、指摘しないであげるのが礼儀な気もするのに、うちの先輩は言っちゃうんだなあ。なんだか無性におかしくなって、泣きながら笑ってしまう。

「え、亜紗、笑うのかよ。ひどくない?」

凧久の肩が亜紗の肩に触れた。男子が女子に、付き合ってもないのにするには近すぎる距離感だけど、それを茶化すようなメンバァーが、オンライン含めて誰もいなそうなのが、亜紗には心地よかつた。みんなと出会えてよかつたと思つた。

肩に、凧久の体温を感じる。

ずっと一緒にいたけど、こんなふうに触れ合うのは、そういえば初めてだ。凧久が亜紗から離れ、幹事の三カ所だけをつないでいたパソコンの方に近寄っていく。

「奥くん、いる?」

「いますよー、なんですか!」

それまで、こちらのパソコンは、声が二重になってしまうから、と音声を切つてあつたのだが、ミュートを解除したようだ。画面を覗き込み、凧久が尋ねた。

「転校つて、大変?」

心細そうに聞く声に、一度引いた亜紗の涙がまたこみ上げてきそうになる。平然として見えた凧久が、本当はずっと不安だったのかもしれないこと、それを、ようやく今日になって口に出せているのかもしれないこと。考えたら、胸が押しつぶされそうになる。

「大変は大変だけど……大丈夫。どこに行っても!」

凧久の問いかけを受けた奥が、動揺する様子もなく答える。笑顔だった。

(出典 辻村深月「この夏の星を見る」株式会社KADOKAWAによる)

問一 〰〰〰線①～⑤の漢字の読みをひらがなで答えなさい。

問二 〰〰〰線 a・b の語句の意味として最も適当なものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

a 目を細める	ア 注意深く全体を見回す
	イ 意味ありげに合図をおくる
ウ 恥ずかしそうに視線をそらす	エ 楽しくやる気にあふれている
	オ うれしそうにはほえみを浮かべる
b 茶化す	ア まねする
	イ からかう
ウ うらやましが	エ 言いふらす
	オ 意識する

問三 〰〰〰線1「亜紗が最初に見て思ったのと同じ感動が伝わりますように」とありますが、亜紗が初めて土星を見たときどのように感じましたか。それが記された一文を本文中から抜き出し、最初の五字を答えなさい。(句読点等記号も一字に数える。以下の問いも同じ)。

問四 — 線2「固唾をのんで、その様子を見守る」とありますが、このときの亜紗たちの気持ちとして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 花楓が大勢の人に見つめられて緊張して失敗するのではないかと不安に感じている。

イ 花楓が観測会をきっかけに星に興味を持ってもらえるのではないかと期待している。

ウ 花楓が体に負担をかけることなく無事に星を観測できるかどうか気がかりに思っている。

エ 花楓がためらうことなく車椅子を進めて望遠鏡を覗いたことにびっくりしている。

オ 花楓が接眼部を正確に動かして土星をとらえられるかどうか非常に心配している。

問五 — 線3「ちよつと不服そうに」とありますが、このときの凜久の気持ちとして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 花楓がスポーツに熱心に打ち込んでこなかったことを残念に思っている。

イ 花楓が自分の長所を伸ばして活躍できる場がないことに少し不満を感じている。

ウ 花楓が健常者と一緒に自由に観測できる施設がないことをもどかしく感じている。

エ 花楓が才能を伸ばしてくれる人と出会えていないことに少しがっかりしている。

オ 花楓が失敗を恐れて新しい環境に飛び込まないことを歯がゆく思っている。

問六 — 線4「とても光栄だと感じた」とありますが、なぜですか。その理由として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 凜久が望遠鏡作りに自分を誘ってくれたのは、自分の実力を認めている証だと思ったから。

イ 凜久が家族についてたくさん話すのは、花楓の参加を心から喜んでいる証だと思ったから。

ウ 凜久が最初の観測者として花楓を選ぶのは、花楓のことを大切にしている証だと思ったから。

エ 凜久が花楓のことを打ち明けてくれたのは、自分のことを信頼している証だと思ったから。

オ 凜久が花楓の相手に自分を選んだのは、自分のことを親友と認めている証だと思ったから。

問七 — 線5「胸が押しつぶされそうになる」とありますが、このときの亜紗の気持ちを七十文字以内で説明しなさい。

Ⅲ 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(問題の都合上、一部表記を変えた部分があります。)

(貧しくても酒を用意し、つまみを求めて)

皆人親に孝行をするとして、身貧しうしても酒をととのへ、肴を求めて、是れをあたへ、孝行面をするかと思へば、又ある時は

(反抗して、機嫌をそこねて)

たてをつき、氣に逆ふて親の腹を立つる。是れ孝に似て孝にあらず、口中を養ふばかりを、孝行と意得る事、浅ましき事なり。

(食物を準備すること)

(道理に合わない事を言っても、できるだけ言葉づかいをていねい

1 誠の孝行といふは、食物ばかりの事にあらず。何事にても親の命を背かず、たとひ不義なる事をいふとも、いかに言葉を柔らかに

にして理由を言つて説得するのがよい。)

(鋭く相手を見て)

にわけをいひて諫むべし。不義なるとおほごゑをあげ、目にかどをたて怒り回る事、親に 2 の第一、又脇よりも見苦し

(そばからも見苦し

(理由が相手によく伝わるものでもない)

く、怒りて物をいひたるとて、理究のよく聞ゆる物にてもなし。腹を立て物をいふ時は、いひ過し多くしてかうくわひする事のみ

(それぞれの身にも覚えがあるだろう)

なり。又面々の身にも覚えあらん。我に人の諫めをいふに、柔らかに詞をいへば心よく合点し、よき事にてもあらけなく人のいふ

(自分の身をつねって)

(ことわざ)

4 時は、我わろきことはさて置き、腹立つるものなり。「身をつみて人の痛さを知れ」と世話にいひ伝へたる事、尤もの理なり。親

(孝行と言ふだろうが、いや言わない)

を持つ程の人、仮初にもあらけなくいひて、親の腹を立つる事あるべからず。是れをさして孝行といはんか。

(「身の鏡」による)

問一 — 線a「ととのへ」・b「おほごゑ」・c「かうくわひ」を現代仮名づかいによる表記に書き改めなさい。

問二——線3「心よく合点し」・4「我わろきこと」の文中における意味として、最も適当なものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

3 心よく合点し

ア 気軽に賛成し
イ 運よく成功し
ウ 積極的に改善し
エ 簡単に勘違いし
オ 気分よく納得し

4 我わろきこと

ア 自分の嫌いなこと
イ 自分よくないこと
ウ 自分の苦手なこと
エ 自分分らないこと
オ 自分の困っていること

問三——線1「誠の孝行」とありますが、筆者の考える孝行とはどういうことですか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 親に苦勞をかけないこと。

イ 親の好物を用意すること。

ウ 親を大切に思うこと。

エ 親の言うことに従うこと。

オ 親と一緒に暮らすこと。

問四——に入る言葉として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 不安 イ 不吉 ウ 不変 エ 不明 オ 不孝

問五——線5「是れ」の指す内容を本文中から十七字で抜き出し、最初と最後の三字を答えなさい。(句読点等記号も一字に数える。)

